冷徹秘書は生贄（いけにえ）の恋人を溺愛する

1　悪魔と媚薬

私の人生、比較的上手く進んできたほうじゃないかと思う。人付き合いはあまり得意じゃないけれど、人見知りというほどでもない。

大学を卒業し、大手企業の地方支社に運良く入社することができた。入社してからは職場の人間関係に気を遣い、大抵のことは笑顔で乗り切ってきたと思う。

しかし、順風満帆と思っていたのは最初の二年、本社勤務になるまでだった。いや正しくは、そこで厄介な先輩に捕まるまでは。

私、天沢佳純、二十六歳。今現在、人生最大のピンチに陥っている。

「な……何やってくれちゃってるんですか……！」

普段なら絶対利用しないような最高級ホテルの、綺麗な夜景が有名なオーセンティックバー。その入り口で、うっかり大声を出すところだった。

愕然とする私の腕は、総務の先輩である井筒美晴の手にがっしり掴まれている。ふわふわくるりんとした可愛らしい髪型に、柔らかな素材のワンピースがよく似合う。ただそれが井筒先輩というだけで、どうしてもあざとく見えてしまうのはなぜなのか。

私が転属してきた時には、既にオフィス内で『面倒な人』のポジションにいた彼女が私の世話係になったのは、恐らく体よく押し付けられたということだろう。誰もいないよりはと思っていたが、ひとりのほうが楽だったと思い直すのにひと月かからなかった。それから二年、オフィスでも色々と無理難題を言ってくるし、仕事のミスの尻拭いをさせられるのはなぜか後輩の私。

だって誰も助けてくれないんだもの。

どうして彼女に誰も何も言わないのかといえば、それは彼女が我が社のグループ会社の社長令嬢だからだ。どうやら父親のコネで入社したらしい。

怒らせると面倒という話だし、これまで言うことを聞いてやり過ごしてきたが……彼女は今夜、とうとう私の手には負えない厄介事に巻き込んでくれた。

「嫌です、いくらなんでも！」

「何が嫌なのよ。相手は超エリートよ。近づくチャンスだと思えばいいじゃない」

そう言うと、彼女の視線が私の頭の先から足元まで値踏みするように走る。その視線の意味は、言われなくてもわかった。

可愛い系美人の井筒先輩に比べれば、私は何もかもが平均的。目立たない顔立ち、黒い直毛は長く伸ばして後頭部でひとつに結んでいる。背丈もスタイルも標準だ。

井筒先輩は、小柄な身体の割に豊満な胸を強調するように突き出し、ニヤッと笑う。

「……本社に来ても、ちっとも垢抜けないわね」

「余計なお世話ですよ！」

むかっとして思わず反論してしまった。いつもならそれで機嫌が悪くなる井筒先輩だが、さすがに今日は、自分が無茶を言っている自覚があるらしい。

「ね、お願い。彼氏を作るチャンスと思えばいいじゃない。相手は文句なしのハイスペックよ」

「近づきたいなんて思ったことありませんってば。ほんと、考え直してください」

「だめよ。社長とお近づきになるためには、どうしてもあの男が邪魔なのよ」

そうだ、あまりのことに忘れかけていたが、井筒先輩の言う『あの男』がこのバーの中にいるのだ。そう思っただけで、バーの重厚なドアの下から冷気が流れ出ている気がして、ぞくりと背筋が凍った。もちろん、ただの錯覚にすぎないのだが『あの男』にはそう思わせるだけの恐ろしさがある。

我が社の社長は、優しげな雰囲気のイケメンだ。日本有数の大企業、高輪グループの後継者で現会長の長男。人柄も穏やかで、社内外問わず、社長に憧れる女性は多い。

井筒先輩が、高輪社長狙いなのは知っていた。そして、その社長に近づくためには、『あの男』が邪魔なのもよくわかる。だがしかし。

「だからって……」

……やっていいことと悪いことがあるでしょうが!?　普通、思いついてもやらないよ！

逃がすまいと私の腕にしがみつく彼女の手には、小さな瓶が握られている。先輩は人差し指と親指でそれを挟んで、私の目の前に掲げた。

――天使の媚薬。

彼女はこれを『あの男』に飲ませて、バーから連れ出せと言うのだ。待ち合わせている高輪社長が、ここに来る前に。

っていうか、媚薬を盛った上で彼氏を作るチャンスって、つまり既成事実を作ってしまえってことだろう。

突っ込みどころが多すぎて、もうどこから突っ込めばいいのかわからない。

「何を考えてるんですか、そんな怪しいものを飲ませるなんて」

「大丈夫よ、ちゃんと合法なところで買ったものだから」

あっけらかんと言ってのける彼女に愕然とすること、本日二回目。媚薬に合法か非合法かなんてあるの!?

いわゆる、アダルトグッズというやつだろうか。茶色の小瓶に薄桃色のラベルが貼られ、品名が可愛らしいロゴで印刷されている。合法だろうが、私の目には怪しさ満載だ。

「どこで買ったものだとしても、そういうのを人に盛っていい……」

「だからもう遅いってば。言ったでしょ、グラスに入れてきちゃったって」

頭の中が、真っ白になった。こんな怪しげなものを、本当に『あの人』のグラスに入れてしまったらしい。

この困った先輩には、これまでも遠回しに色々と注意してきたつもりだけれど……

――怪しいものを人に盛ってはいけません。

それは、わざわざ教えなければいけないことなのだろうか!?

「じゃあ、たのんだから！」

「あっ！」

先輩は言いたいことだけ言うと、呆然とする私の手を振り払いさっさと立ち去ってしまった。

嘘でしょう。あの人、ほんとに置いてったよ……

あり得ん。本当にあり得ない。

正直、どうして先輩の尻拭いを私がしなければいけないのかと思うけれど、妙な薬を盛られた人をそのまま放置して帰るわけにもいかなかった。

媚薬なんて効果があるかどうかは知らないけど、先輩が言うにはネットの口コミナンバーワンの商品らしい。そんなものが『あの人』の口に入る前に……いや、もう遅いだろうか。

先輩曰く、隣のスツールに座り、携帯が鳴って彼が席を外した隙にグラスに媚薬を入れたらしい。

そのまま何食わぬ顔で会計を済まして店を出て、事前に呼び出されていた私をバーの入り口で捕まえた、と。

ここで先輩と話していたのは数分くらいだけれど、その間に彼が電話を終えてカウンター席に戻っているかどうかが問題だ。

私にとっては気後れしてしまうようなバーだが、仕方がない。覚悟を決めて、バーの扉を押し開けた。

店内はクラシック音楽が流れていた。内装は黒と銀で統一されていて、窓際にいくつかソファ席がある。でもそこは、雰囲気的にカップル限定のような気がする。平日夜ということもあるのか、

客は少なく席のほとんどが空いていた。
「いらっしゃいませ」
白いワイシャツに黒のベストという如何にもバーテンダーといった制服を着た店員に声をかけられ、思わず肩が跳ねる。
仕草でどの席に座るか尋ねられて、咄嗟にカウンターに目を向けた。バーカウンターには等間隔にスツールが並び、入り口に近い席にスーツの男性が座っているが、知らない人だ。そして反対側の奥に、もうひとり。
ここからでは、背中しか見えない。ダークスーツの広い背中。スツールに腰かけていてもわかる、背の高さと長い足。艶やかな黒髪は、襟足の長さで撫でつけられている。
どくんと、心臓が壊れそうなほど大きな音を立てた。もちろん、それは胸のときめきとか、そういう種類のものではない。
ああ、あの人だ……
黒木貴仁、三十二歳。我が社の社長秘書で、今現在、社内で一番恐れられている人。彼は私のことなど知りもしないだろうけれど、本社勤務の社員で彼を知らない人はまずいない。私が彼の年齢までしっかり覚えているのは、本社に来てすぐの頃社内報で彼と社長の記事を読み、大企業なのに随分若い社長と秘書だと印象に残ったからだ。
店員にカウンターがいいと視線で伝えた私は、ゆっくりと彼のスツールに近づいていく。そうしながらも、頭の中はすっかりパニックだった。

……私、ここからどうしたらいいの？
あの脳内お花畑な先輩が、やばい人にやばいものを盛ったと知ってしまった以上、効果の有無にかかわらず、放置するのはまずいと思った。その思いだけで店に入ってしまったけれど……ここから一体、どうすればいいというのか。
一番いいのは飲むのを阻止することだが、もし飲んでしまったらその後の対応を考えなくてはいけない。いや、既に飲んでる？　もう遅い？
どくどくどくと心臓の音がうるさい。カウンターに近づくほどに足が震えた。さすがに、すぐ隣のスツールに座るのは怖くて、ひとつ空けた席に手を置く。
恐る恐る隣を見る。
細いフレームの眼鏡をかけた端整な横顔は、間違いなく黒木さんだ。彼の手元のグラスを見ると、洋酒の水割りらしい琥珀色の液体が揺れている。
見ているうちに、彼がそれを口元に運び一息に傾けた。
「あっ……！」
思わず声が出てしまう。どうやって止めるか、考える余裕もなかった。私の声が聞こえたのか、彼が視線をこちらに向ける。
ばっちりと目が合い、私はひゅっと悲鳴を呑み込んだ。
凍てつくような冷たい視線が、私を見ている。その冷気にあてられた私の身体が、凍り付いたようにぴきっと固まった。

やばい。死んだ。

いや、まだセーフ？　目は合ったが、向こうは私が同じ会社の社員だとは気づいてないはずだ。

視線の恐怖だけで当初の目的を忘れて逃げ出しそうになった。

彼が社内で恐れられているのには理由がある。今から数年前、若くまだ立場の弱かった高輪社長から後継者の座を奪おうと、当時常務に就いたばかりの弟を担ぎ上げようとする勢力があった。その弟一派の役員たちを追い詰め失脚させたのが、黒木さんだと噂で聞いた。

それはもう、悪魔のごとく容赦のない追い落とし方だったらしい。その悪魔の視界に、私は今、入ってしまった。

眼鏡越しの鋭い眼光が、悪魔と喩えられる彼の恐ろしさが決して誇張ではないのだと思わせる。私の背筋にぞくぞくと寒気が走った。

次の瞬間、冷たい印象に拍車をかける薄い唇が開く。

「……おひとりですか」

「え……」

優しく誘うような低い声だ。薄情そうに見えた唇が、柔らかく笑みを作っている。一瞬でくるりとひっくり返った印象に、返事も忘れて目を見開いた。

「失礼、待ち合わせでしたか」

「あ、いえ！　……ひとりです」

慌ててそう答えると、彼は自分の隣のスツールを私に勧める。

「連れが来るまでしばらくかかりそうで。もしよければ、それまで付き合っていただけませんか」

とても穏やかな物言いがあまりに意外で、ちょっとときめいてしまう。

これはチャンスだ。彼は媚薬入りのお酒を半分ほど飲んでしまっている。見たところ、特に変化はなさそうだから媚薬なんて眉唾ものかもしれないけれど、まだ安心はできない。すぐに効果が表れるものではないかもしれないし、もうしばらく様子を見たほうがよさそうだ。

「それじゃあ、失礼します……」

いくら雰囲気が和らいだといっても、やはり声が震える。どうにか笑みを浮かべてスツールに座った私の目の前で、彼はグラスに残っていた酒を全部呷ってしまった。

声を上げる間もなく、またしても止められなかった。いや、そもそもどうやって止めたらいいかもわからないのだが。

彼はグラスをカウンターの一段高いところに置くと、中にいるバーテンダーに声をかける。

「同じものを。……あなたは何を飲みますか」

後半は私に向けた問いかけだ。咄嗟に思い浮かばず、迷った末に私も同じものを頼んだ。

「結構、強めだけど大丈夫？」

カウンターに頬杖をつき、こちらを流し目で見る。その表情に、くらくらしてしまう。まだ酔ってもいないのに。

「あ、ごめんなさい。実は何をどう頼んでいいかよくわからなくて」

確かに、ひとくち飲むとかなり強い。

「あまり慣れてなさそうだと思った」
大きな手で新しいグラスを揺らしながら、彼はゆっくりとお酒を楽しむ。もしかして、慣れない様子を見かねて声をかけてくれたのだろうか。
だとしたら、実は優しい人なのかもしれない。
そう思ってしまうと、尚更罪悪感でちくちくと胸が痛くなる。先輩はそんな人に、媚薬なんて得体のしれないものを飲ませてしまったのだ。
……ああ、でも。やっぱりあの薬に効果なんてないのかも。
媚薬の効果どころか、こんなに強いお酒を飲んでいても彼の表情は少しも変わらない。だが、その横顔を盗み見てほっとしていられたのは、新しいグラスが空になるまでだった。
彼が、ふうっと苦しげな息を吐き、額に手を当てた。もしかして、薬のせいで具合が悪くなってきたのかと、どきどきしてしまう。
「あの……大丈夫ですか？」
「ああ、少し、酔ったようで」
彼は心配させまいとしているのか、笑ってこちらを見た。そんな表情を向けられると、本当に申し訳なくなってくる。顔色を確かめようとしたが、店内ではわかりづらい。ほんのり赤く見えるのは、橙色を帯びた店内照明のせいにも思えるし、そうでないのかもしれない。
「……普段、このくらいで酔うことはないんだが。申し訳ない、こちらから誘っておきながら」
すまなそうに私に謝って「もしかすると風邪でも引きかけているのかもしれない」と言った。

「私のことは気にしないでください……大丈夫ですか？」
やっぱり、媚薬のせいだろうか。本当に媚薬が効いているのだとしたら、これからどうなるのだろう。放っておいて大丈夫なのか。万が一薬が身体に合わなかったりして、もっと具合が悪くなったりしないだろうか。
黒木さんがバーテンダーにカードを渡し、私の分も一緒にと言っているのが聞こえた。
「そんな、私の分まで」
慌てて止めたが、バーテンダーは黒木さんの言った通りに会計を済ましてしまった。
「誘っておきながら悪いが、先に失礼する。貴女はどうぞゆっくり飲んで行ってください」
丁寧にそう言われたけれど、やはり気になる。会計のこともあるが、何より彼の体調だ。スツールから立ち上がり店を出ようとする彼の足元がふらついていた。
だめだ。放っておけない。そう、思ってしまった。
「あ、あの……！」
気づくと私は、彼を呼び止めていた。
「ご自宅はこの近くですか？　具合が悪そうですし、タクシーで帰られるならそこまで送ります。なんでしたら、病院にも付き添います」
「……親切にありがとうございます」
体調が優れない状態で、ひとりで帰るのは不安だろう。彼の口元に浮かんだ笑みは、安心からくるものに違いないと私は疑いもしなかった。

最初に不安を感じたのは、彼の行き先が自宅でもタクシー乗り場でもなく、このホテルの客室だと言われた時だ。

今夜はホテルを利用するつもりだったから部屋を取ってあるのだと、そこまで付き添ってもらえれば助かると言われた。

話しながら零れる吐息が辛そうで、迷わず頷いてしまった。だが、一緒にエレベーターに乗り込んだところで、これはまずい状況なのではないかと思い始める。

いや、でも、店での彼はとても紳士的だった。それに具合が悪いなら、やはり部屋に付き添うくらいはしなければ。

エレベーターが上昇していく中、こっそりとスマートフォンで『天使の媚薬』を検索した。販売元のサイトなら、万一具合が悪くなった場合の対処の仕方などが書いてあるかもしれないと思ったのだ。

ついでに本当に効くのかどうか、体験談みたいなものがあればと思った。だって今の状況、下手したら貞操の危機に繋がる。

サイトを見つけて、さっと目を通した。載っている体験談は高評価のものばかり。つまりこの薬は、効果があるということだろうか。

……わ、私、このままついてって大丈夫？

客室のある階に着いてしまい、躊躇いながらも彼に続いてエレベーターを降りる。

後ろから見る限り、廊下を歩く彼の足取りは支えなければ歩けないほどではない。しばらくして

立ち止まった彼が、カードキーを取り出し部屋のドアを開けた。

「あの、大丈夫そうなら、私はここで……」

もう大丈夫だろうと、急いで引き返そうとした私の腕が、彼に捕まえられた。

今になって思えば、私が正常な判断ができるくらい落ち着いていたら、逃げられる可能性もあったはずなのだ。

「あ……の……」

迂闊にも、私はそれを見過ごして、媚薬を飲まされた彼の体調にばかり気を取られてしまった。だから今、こうなっている。

背中にはベッドのスプリング。目の前には私の顔の横に片手をついて微笑する男。それは、バーで見たような優しげな笑顔なんかではなく、明らかに冷笑だった。

黒木さんはもう片方の手で眼鏡を外すと、それをベッドのサイドテーブルに置き、再び私を真上から見下ろしてくる。

「さて……総務の天沢佳純だったか」

驚いたことに、彼は私のことを知っていたらしい。まったく接点などないのに、部署とフルネームまで。

やばい。まずい。まさか身元が割れているとは。

しかもその上でこの状況に持ち込まれたということは、彼はわかっていて私を部屋に連れ込んだ

のだ。
眼鏡越しじゃない、漆黒の瞳が真上から私を捉える。
「どういうつもりで俺に近づいた？」
ナイフみたいに鋭く細められた目に、思わず「ひっ」と喉が悲鳴を上げた。
ああ、やばいやばいやばい。これは、貞操の危機どころじゃない。
生命の危機、のような気がする……！
返答によっては、社会的に抹殺される——そんな空気をひしひしと感じた……！
とりあえず、絶対に言ってはいけないことがひとつ。先輩が媚薬を飲ませたことを口にしたら、何をされるかわからない。
というか、媚薬どうなったの。まったく効いてない？　サイトの口コミでは高評価だったのに？
目の前の彼は、正気を失っている様子もないし酔っている様子もない。まして、先ほどまでの具合の悪そうな様子もまったくない。
つまり、騙されたのだ、私は。
「ち、近づいたって……声をかけたのはそちらからだったと思いますが」
どうにか、誤魔化さなければと気ばかりが焦る。上手く動かない頭で、決して私から近づいたわけではないと主張する。
「そちらからとは？」
黒木さんは眼鏡を外した手で、今度はネクタイの結び目を掴んで緩める。そんな仕草が、目に毒

なほど色っぽい。それはもう、毒々しいほどに。
くらくらしながらどうにか答えた。
「で、ですから、黒木さんから声をかけてきたじゃないですか」
「つまり、俺が黒木貴仁だとわかってたんだな」
「えっ、あ……」
……どうやら、語るに落ちたようです。
嫌だもう、この人と喋るの。
心臓が持たない。緊張して、息が上がる。
「それは、もちろん……黒木さんは社内では有名だし……でも、わざと近づいたわけではっ……」
「じゃあ、どうして俺が声をかけた時に何も言わなかった？」
「まさか私のことを知ってるとは思わなかったし、顔見知りでもない一社員に名乗られても困ると思ったからです！」
頭をフル回転させ、穏便にこの場をやり過ごす方法を必死に考えた。この返事に満足していただけただろうか。そんな私を、彼は何もかも見透かしそうな、感情をそぎ落とした冷ややかな顔で睨んできて、怖いのに目を逸らせない。
上がり続ける心拍数に気分が悪くなってきた。逃げたいと思うのに、身体はがっちがちに固まっている。
「ふぅん」

無表情のままぼそりと呟かれた声に、すぐにわかった。
まったく信じてもらえていない。
びくびくしながら彼の言葉を待つ。無言がしばらく続いたが、少しして彼が軽く肩を竦めた。
「まあ……そっちがそう言うなら」
ようやく解放してもらえるとほっと力を抜いたところで、続く彼の言葉が耳に入った。
「こっちは勝手にやらせてもらおう」
「え？」
彼はそう言うなり、解いたネクタイを、しゅるっと音を鳴らして襟から引き抜いた。その仕草が、とても様になる。仄暗い部屋の照明の中で、彼はとても艶めいて見えた。状況も忘れ見とれてしまう。
これほど近くで彼を見たのは初めてだ。遠目にも綺麗な人だと思っていたけれど、近くで見るとその顔の造形はあまりに芸術的だった。高輪社長も美形だけれど、彼の顔には人間味というか愛嬌がある。対して彼は、悪魔と呼ばれるのが似合うくらい、恐ろしいほど整った容貌をしていた。
そんなことを考えていると、頬に手が触れた。指先が頬の丸みを撫で、耳に移る。耳珠と耳孔の入り口を指先でくすぐられて、ぞくぞくとした感覚が背筋を襲った。
「んっ」
思わず顔を背ける。零れた自分の声が信じられないほど甘く聞こえて、それでようやく我に返った。いつのまにか、彼に見とれて抵抗を忘れてしまっていた。

……え、あ、う、嘘、嘘……冗談でしょう!?
大きな手が、私の首筋を撫でる。指先に少し力を入れて、肌の弾力を確かめるような撫で方に、身体がぞわぞわとして力が抜けた。慌てて覆い被さる黒木さんを押しのけようとしても、まったく歯が立たない。
白いワイシャツ越しに、筋肉質な硬い身体の感触が手のひらに伝わってくる。首筋から移動した彼の手が、乱れて開いたブラウスの中へ入り込んできた。
「ひゃっ」
変な声が出てしまったが、彼の手はまったく躊躇いなく進み、肩を撫でながらブラウスの布と一緒に下着の肩紐をずらしてしまう。
……なんで、なんでこんなことになっているの。
「あ、あの、あのっ……」
「なんだ」
声が冷たい。こんなことをしているのに、彼には少しの興奮も見られない。そう、だからこれは媚薬のせいなんかではないはずだ。だったら。
「なんでこんなことっ」
「なんで？　変なことを聞くな。そっちの思惑に乗ってやっているつもりだが」
思惑って何？　彼は一体なんの話をしているのか。
「そのつもりで部屋までついてきたんだろう」

「ち、違いま、あ、や、……！　やめてやめて」
ブラジャーがずらされてコンプレックスの小さな胸が、彼の目に晒される。かあっと頭に血が集まって、頬が熱くなった。
いやー！　なんでこの人、こんなに淡々と事を進めるの！
「み、見ないでくださいっ……」
胸を隠そうとした手は、簡単に彼の手に捕まってシーツの上に押し付けられた。もう片方の手も振り払われて、私のささやかな膨らみの横に彼の手が触れる。
「あ……う……」
見れば、胸の一番敏感な先を避けるように、横から包み込まれていた。とても、大きくて綺麗な手に。
指が長いなあ、なんて、呑気に考えている場合ではない。
視線を上げると、目の前にはじっと観察するように私を見ている黒い目がふたつ。
かああっと顔に熱が集まる。きっと今私の顔は、目も当てられないほど真っ赤になっていることだろう。
そこで、ふっと笑ったような吐息が聞こえた。黒木さんが少しだけ表情を和らげる。
「……まるで林檎だな」
バーで見た余所行きの笑顔じゃない。悪魔でもなくちゃんと血の通った人間に見えた。
その笑みがまた意地悪なものに変わったと思った直後、私の首筋に顔が寄せられ吐息が肌をくすぐる。
「んんっ……」
ちゅっ、と可愛らしい音を立てて、肌を啄まれた。けれど、可愛らしいのは音だけだった。彼の乾いた唇は、そのまま羽のような柔らかさで私の肌の上を滑る。その間も、胸の上に置かれた手は軽く力を入れて膨らみの周囲を辿っていた。
「あ、あ、あ」
小さなさざ波のような心地よさが、彼の触れているところから身体中に広がっていく。感じたくない、いや感じてはいけないのだ。それなのに、どうにもならない。
触れ方はこの上なく優しいのに、その効果は暴力的なほどだ。こちらの意思など関係なく、身体の力が抜けていき、頭の芯がじんと痺れる。
「んーっ」
甘い声が漏れ続けるのをどうにかしたくて唇を引き結ぶ。ついでに相手を振り払おうと激しく首を振ったら、ふっと息で笑われた。
たちまち、カチンと頭にきた。文句を言おうと口を開いた次の瞬間、耳の裏側にぬるりと舌が触れる。
「あああっ」
ぞぞ、と甘い痺れに身を捩る。片肘をベッドについた彼の腕が、私の頭を囲った。顔を横に背けた状態で、がっしりと頭を固定され、逃げる身体を抑え込まれる。そして耳元に、彼の唇を感じた。

「んあっ」
「……耳、弱いな」
吐息まじりの声を吹き込まれただけで零れてしまった甘い声。いや、耳、弱くない人なんていないでしょ？
今の私は、彼に自分の弱点をさらけ出した状態で、身動きひとつできないでいる。
これまでは、この状況はただの脅しにすぎないと、心のどこかで彼の良心に期待していたのだと思う。けれど、ここにきてようやく、彼にこの行為をやめるつもりが欠片もないのだと理解した。
「や、だめ、やめ、やめて」
顔を横に向けたまま動けない。手に上手く力が入らなくて役に立たない。唯一まともに動いてくれそうな足で、シーツを蹴って逃げようとした。けれど……
「あ、あ、あああっ、あっ」
耳朶から耳の裏まで、吐息を吹きかけながら舌で舐め上げられ、耳の縁を辿って耳朶に戻る。それを何度も繰り返され、無意識に零れる甘い声が部屋に響いた。否応なく身体の熱が上がる中、頭を押さえる手の指が髪を梳くように地肌を撫でる。まるで私を宥めすかして、甘やかしているようだった。
じっくりと時間をかけ、散々耳と首筋を舐められた私は、もう何か考える余裕もない。じっとりと肌が汗ばんでいる。服はすっかり乱されて、隠れていないところのほうが多い。
耳への愛撫ですっかり私から抵抗力を奪った彼の唇は、今はささやかな胸の谷間で肌の柔らかさ

を楽しんでいた。胸元で弾む唇に、羞恥心が湧き上がる。
スカートの裾から忍び込んだ手が、太腿を撫でながら奥に入ってこようとして、びくりと身体を震わせる。するとその手は、一度膝まで戻った。
そんな彼の冷静さが怖いと、僅かに残った思考が訴えている。
そう、この状況においてなお、彼は冷静に私の反応を見極めていた。
そのことに気がついて、少し頭が冷える。この人は多分、ただ私を抱こうとしているわけではない気がした。
……何をしようとしているんだろう？
考えていると、太腿の裏をさわさわと撫でられて、また頭の芯が痺れてくる。だめだ、このままでは、本当に手を出されて終わりになってしまう。
力では敵わないし、泣いて許してくれるタイプにも見えない。
この窮地を脱出するには。
そうだ、話だ。何か、話をするほうに持っていこう。
「あ、あっ、あのっ……そういえば、なんですけどっ……」
浅い息遣いでどうにか声を出したからか、喘ぎながらのみっともない喋り方になった。だけど今は、そんなことを気にしていられない。
「なんで、私のこと、知って……」
純粋に疑問だったことをとりあえず口にする。

「本社の社員の顔と名前と部署くらい全員頭に入ってる」
「う、うそぉ……何人いると思って……」
社員全員……全員、って言った？
それを知って、頭の中で何かが引っかかる。しかし、引っかかった何かを考えるだけの時間を、彼は与えてくれなかった。
「あんっ……」
まるでお仕置きでもするみたいに、突然、胸の先に刺激が走る。
胸にあった手の指で蕾をきゅっと捻られたのだ。
「あっ、あ、あ」
親指と人差し指で、きゅっきゅっとリズムをつけて摘まれる。甘い刺激に、また頭の中が熱くなってきて、強く目をつむった。
目を閉じて胸からの刺激に耐えている間に、すっと内腿を辿った手が素早く足の間に潜り込む。あっと思った時には、ショーツの上からその場所に爪を立てられ、筋に沿ってなぞられた。
「ひ、あああああん」
中心から、上部に向けて指を動かされ、くるりと爪で円を描かれる。私の口から、あられもない声が出た。快感がびりびりと脳に響いて、無意識に腰を跳ねさせる。
覆い被さっていた彼が上半身を起こしたことで圧迫感が和らぐが、解放されたわけではない。胸を弄っていた彼の手が肌を撫でながら下りてきて、私の腰骨を掴む。そして、秘所を撫でていた指

がショーツの中に潜り込んできた。
「や、ああ」
ぐちゅりと音が鳴って、泣きたくなるくらいに恥ずかしくなる。こんな状況なのに、そこはしっかりと潤っていた。
私の中で、一線を越えてしまったような諦め感が満ちてくる。
とうとう触れられてしまった場所は、自分の中で最後の砦のような感覚だったのかもしれない。
「やあ、だめ、だめ、だめっ……」
捲れ上がったスカートの中で、ぐちゅぐちゅと音がしている。私の腰を掴んでいた手が、指にショーツの端を引っかけ下ろす。太腿の中ほどまで下ろされたところで、咄嗟に膝を曲げて足を閉じようとした。しかし、黒木さんの身体が邪魔をして叶わない。
仕方なくスカートの裾を掴んで、せめてもと自分の足に押し付けた。足の間に、彼の手を挟んだまま。
「だ、だめ、もうっ……やめて」
そう言って下唇を噛みしめる。そんな私を見下ろす彼は、悔しいほどに乱れていなかった。私はこんなに淫らに乱されているのに、彼はワイシャツのボタンを僅かにふたつ外しているだけで、汗ひとつかいていない。
ここが会社なら「さてもう一仕事するか」なんて言い出しそうな雰囲気だ。私ひとりだけが、全身の肌を真っ赤に染めて服をぐちゃぐちゃにしている。

悔しくて、乱れた息を無理やり呑み込み、黒木さんを睨んだ。私を見返す彼の目は涼しいままだけど、手が止まった。
「やめてほしい？」
秘所に触れていた指が、くっと関節を曲げてその場所を刺激する。
「んっ……」
声は噛み殺したつもりだったけれど、少しだけ漏れた。それでも相手を睨み続けていると、なぜだかとても、面白いものを見るような目をされた。
「……やめてほしそうには見えないけどな」
指を曲げられる度に、くちゅくちゅと音が鳴る。彼の指を冷たく感じるのは、私のその場所が熱くなっているからだろうか。
「やめ、くださいっ。ほんとに、そんなつもりで、ついてきたわけじゃなくて、具合が悪そうだったからでっ……」
ゆっくりと私の呼吸を乱す、もどかしい愉悦に耐えながら、どうにかこうにか、言葉を発した。彼の指先で繰り返し与えられる刺激に、曲げた膝がぴくぴくと反応している。
「そうか、でも、まあ……遊んでいけ」
彼の声は、相変わらず熱がなく、そして行動には容赦の欠片もなかった。
立てた私の膝に、秘所をあやす手とは反対の手を添えると、彼はそこに自分の頭を寄せた。まるでまくらにでもするみたいに。

「あ、あそ、あそ……？」
……遊んでいけ!?
やめてと言っているのに、その返しはないだろう。
なんだろう、何をどう言えばいいのか、まったくわからない。ただ、馬鹿にされているのだけは、よーくわかった。
かっと頭に血が上る。力では敵わなくても、そう簡単に好きにされてたまるかと遅まきながらに反発心が生まれた。それが、彼に反撃する気力に変わったらしい。
相手は悪魔と恐れられている人だと、無意識に萎縮してしまっていた。けれど――
ぶんっと彼が抱いているほうの足を振り上げる。そのまま、彼の顔面を標的にした。力では劣るけれど、さすがに顔面に足が当たれば隙ができるはずだ。そうしたら、逃げ出せる。
「おっと」
振り上げた足を、ひょい、と躱されて、膝の裏を掴まれた。不意打ちを狙ってもっと慎重にやればよかった。後悔してももう遅い。
彼は私の膝裏を掴んだまま、上から身体を押さえ付けるように圧し掛かってくる。
「ひゃあんっ」
その拍子に、秘所を擦る指がぐちゅりと音を立てた。彼の手のひらが私の陰核に触れ、そのまま押し潰してくる。
「こ、こんなことして、いいんですか、社長の秘書が……っ」

「……まあ、よくはないが……それを言ったらお互い様だな？　それに部屋の前まで自分で歩いてきただろう」

暗にこれは同意だと言われ、くすりと耳元で笑われた。がっちりと押さえ込まれた身体は身動きすらできず、反撃の無意味さを教えられる。

濡れた襞を撫でる指は、蜜を絡めるように入り口をくすぐる。同時に、親指が陰核を撫で始めた。腰が甘く痺れて、逃げ場のない熱が溜まっていく。

優しく、緩く、官能を誘う指の動き。否応なく私を愉悦が襲い、目の前がちかちかした。彼の香水だろうか、ふわりとレモンのような爽やかな香りが漂う。

「……もし、本当にやめてほしかったら、何が目的で俺に近づいたのかちゃんと言え？」

命令口調なのに、優しく問いかけられているようで、くらくらと眩暈がした。

ああ、だめ、だめだ。

言っちゃいけないこと。でも言わないとやめてもらえない。でも、本当に、黒木さんに近づきたかったわけじゃなくて、変なものを飲まされた彼が心配だったからで。

でも、薬はまったく効いてなさそうだし具合も悪そうじゃないから、信じてもらえないかもしれない。

「あああああん」

蜜口をくすぐっていた指が、潤んだ中へと潜り込む。くるりと親指の指先で陰核の皮を剥き、熟した花芽を露出させる。

もう、悲鳴みたいな声しか出ない。こんな、全力で感じさせておいて、本当に答えさせる気があるのか不思議に思った。

親指が蜜を絡めて花芽を左右に震わせる。その度に背筋がしなり、足に力が入り勝手に腰が浮き上がった。

「や、あ、あああああっ！」

こんな風に、激しく痙攣したのは初めてだった。がくがくと腰が震える。それでも秘所を弄り続ける指から逃げたくて、必死に彼の手首を掴んだ。

ひくんひくんと細かな痙攣が後を引き、身体の震えが止まらない。

「……天沢、佳純」

まるで確かめるように、フルネームを呼ばれた。汗と一緒に、涙が目尻から一粒落ちる。それを感じながら、私の意識はぷつりと途切れたのだった。

2　神様、ここに悪魔がいます……！

駅から歩いて、会社のビルの入り口が見えた途端に胃が重くなるのを感じた。

毎日、厄介な井筒先輩に振り回されていても、出社拒否したくなるようなことはなかった。

私は何事も割と楽観主義だ。井筒先輩は面倒だが、彼女は婚活のために会社に来ているような人

だし、そのうち相手を見つけるかお見合いでもして結婚退職するだろう。それまでの我慢だと思えば、そんなに辛くはなかった。

だけど、今日ばかりはだめだ。本気で出社したくない。仮病を使おうかと真剣に考えたのも、今日が初めてだ。

「……さいあくだ」

昨夜のことを思い出せば、そりゃ足取りも重くなるというもので。

夜中、ふっと目が覚めたら見知らぬ部屋の天井が見えて、しばらく頭が働かなかった。部屋には私ひとりで、黒木さんの姿はどこにもなく、服も多少乱れているくらいだった。もしやあれは夢だったのかと思いたかったけれど、そんなわけはない。

部屋はチェックアウトが必要なのだろうかとかちらりと考えたけれど、それよりも、もしあの人が戻ってきたらと思うと怖くて、急いで身支度を整え逃げ出した。

タクシーに乗って、家に戻ったのは日付を跨いだ頃。結局それから、一睡もできなかった。

……大丈夫、会社では早々会うことなんてないはず。今までだって数えるくらいしか社内で見かけていないんだから。

一線は、越えていない。それくらいはわかる。だから、このまま何もなかったことにすればいい。社内で出くわさないようにすれば、きっと大丈夫。

「大丈夫、大丈夫。いつもみたいに先輩の尻拭いに奔走してれば、あっという間に一日が終わって、何事もなく帰れる。向こうだって、昨日のことなんてすぐに忘れるに決まってる」

何かを疑われていた気がするけれど、きっとその疑いは晴れたのだ。起きた時にいなかったのは、そういうことだろう。

必死に自分に言い聞かせて、恐る恐る出勤した。高輪コーポレーションのどどんと大きな本社ビル。セキュリティゲートを通過して、オフィスに行く前に一階のコンビニに向かう。眠気覚ましのドリンクを買うためだ。あと、胃薬も買っておきたいけれど、あっただろうか？

キリキリ痛む胃の辺りを押さえながら、あと少しでコンビニの入り口に着くという時だった。

とんとんと軽く肩を叩かれて、びくっと身体が震える。

「ひっ」

小さな悲鳴を上げて固まった。だが、普通に考えて、黒木さんがこんな会社の目立つところで私に声なんてかけてくるはずがない。

同じオフィスの仲間か、きっと井筒先輩だ。井筒先輩なら、今日こそは絶対に説教してやると考えていたからちょうどいい。

そう思って振り向いた。

井筒先輩は、私より少し背が低い。もし彼女なら、振り返ってすぐに目が合うはずのに、そこにあったのはダークスーツにちょっと地味めなネクタイ。

じりじりと視線を上げる。すっとした細い顎に、薄い唇と高い鼻梁が目に入って絶望し、目が合った瞬間ぴきっと固まった。

「おい」

「はいっ！」
反射的に返事をしてから息が止まる。
そこには、何事もなかったかのような無表情の黒木さんが立っていた。
いや、違う。何事もなかったら、彼がこうして私に声をかけてくることなどない。
逃げたい、絶対会いたくないと思っていた相手が目の前にいて私を冷ややかな目で見下ろしているなんて、息どころか心臓も止まってしまいそうだ。
「え、あ……」
「登録したか？」
「え？」
登録？　何を？
驚愕と緊張と恐怖の三拍子で頭がまったく働かない私は、質問の意味がわからない。黒木さんの眉がぴくっと動いて、私はびくっと震えた。
ふう、とため息が聞こえる。彼の指がとんと私のトートバッグの縁を叩くと、すれ違いざまに私の耳元に囁いた。
「名刺を入れておいただろう。登録して今日の昼に連絡を」
そのまま、すっと去って行った。
固まったまま数秒立ち尽くす。黒木さんの冷気が消えた（錯覚）ところで、ぷはっと息を吹き返した。

途端にどくどくと心臓が忙しなく働きだす。本当に止まりかけていたのかもしれない。
「び……びっくりした……」
一体、彼は何を？
そういえば、名刺を入れたと言っていた。
肩に引っかけているのは、昨夜と同じトートバッグだ。肩紐をひとつ外し、中を覗き込む。昨夜は混乱していたし朝もまだ動揺していて、バッグの中なんてほとんど見ていなかった。
ひらりと白いカードのようなものが見えて、嫌な予感がする。手に取ると、彼の名前が書かれた名刺だった。社名と肩書、連絡先が載っている。
そしてくるりと裏を返せば、手書きで携帯番号が書かれていた。つまり、これを登録して、昼に連絡を寄越せということだろうか。
「え、なんで？」
なぜ私がこれを登録して、彼に連絡しないといけないの。
名刺をバッグに戻して、ぎゅっと持ち手を握りしめる。悔しくて腹が立ってきた。昨夜、あんなことをした私をひとり部屋に放置したくせに、平然としたあの態度。
トートバッグを叩いた長い指先を思い出す。
そう、態度は酷くて問答無用でも、あの指先だけは信じられないほど優しかった。
一方的に高められた熱を思い出し、じわじわと顔が熱くなった時、またしてもとんと肩を叩かれた。

「ちょっと」
「ひゃあっ！」
びくんと背筋が伸びる。悲鳴を上げた私を見て訝し気に眉根を寄せたのは、すべての元凶である井筒先輩だった。
「こんなところに突っ立ってどうしたのよ、大丈夫？」
全然大丈夫じゃありません、あなたのせいで！
ここじゃ話しにくいから、と井筒先輩の手に引かれて人の少ないところに連れていかれる。私としても、ちょうどいい。さすがに今回のことは、いくら井筒先輩の頭がお花畑だとしても許されることではない。
けれど非常階段の扉の近くまで来ると、がっしと両腕を掴まれ彼女の顔が近づいてきた。
「ちょっと、あの後どうなったのよ？」
「どうもこうもないです、大変だったんですから……！」
周囲にさっと目を走らせてから、ふたりそろって声を潜める。人の気配はないとはいえ、大きな声で話せることではない。
「大変って、じゃあ上手くいったの？」
なんで『大変だった』が上手くいったことになるのよ！　と爆発しそうになるのをどうにか抑えて言い返す。
「そんなわけないでしょ。いくらなんでもあんな計画無茶すぎます！　お目当ての人を捕まえたいなら、もっと真っ当な方法にしてください！　っていうか、なんなんですか、あれ、全然効かないし！」
途中で怒りのポイントが微妙にズレたが、どうしても言いたかった！
大体、媚薬を飲ませたと言われたから心配してついていったのに、効果が表れるどころかけろっとしていて、むしろ私のほうが散々乱されて、それがどうにも悔しい。こっちが喘ぐ中で、あの少しも熱を感じない目は、なんだ。
「そうなの？　でもあれ、口コミで広がった商品だからかなり効果があるはずなんだけど」
確かに、サイトには口コミがたくさんあった。だが、所詮ネットの口コミだ。信憑性に欠けるのではないだろうか？
ああいう商品サイトがどんな売り方をしているのか私にはわからないけれど、もし本当に効果のあるものなら、それはそれで怖い。
だってあの人には、そんな強力な媚薬が効かなかったということだから。
……さもありなん。
あの人なら、あり得そうだと思ってしまうのがまた怖い。
「っていうか、よく入れられましたね……そんな簡単に近づける雰囲気じゃなかったですよ？」
「目が合った時はまずいと思ったけど、でも社員だと気づかなかったみたい。すぐ目を逸らされたから隣に座ったのよ」
「え、目が合ったんですか」

違和感を覚えて、眉間に力が入った。
……気づかなかった？　黒木さんが、井筒先輩に？
あり得ないでしょう、だって本社の社員の顔は全員覚えているって言ってたんだから。それとも、あれはハッタリでたまたま私のことを覚えていただけ？
いや、きっと、違う。あの言葉に嘘はない気がする。
だとしたら、井筒先輩に気がついていた？
それなら井筒先輩と私が同じ総務だということもわかっていたはずだ。ああ、だから、何を隠しているのかと私を問い詰めたんだ。
……結局、全部、この人のせいか。
脱力して、げんなりしていると、先輩の呑気な声が続いた。
「あら、薬が効かなかったなら、全然大丈夫だったってことじゃない。バーに入った後あっさり帰ったってこと？」
「う……いや、それは」
言えない。絶対知られたくない。あんなことされたなんて、しかも、一方的に気持ちよくさせられただけだなんて、絶対言えない。
思い出すと顔が熱くなってきて、慌てて頭を振った。
「そ、それより、高輪社長はどうなったんですか。社長と出会うきっかけを作りたくてあんなことしたんですよね？」

井筒先輩の調べによると、あのバーで黒木さんと社長がよく待ち合わせをして飲んでいるらしい。しかし黒木さんが隣にいる限り、そう簡単に社長には近寄らせてもらえない。
だからこそ、黒木さんを足止めしようとしたのだろう。
「それがねえ、来なかったのよ、高輪さん……」
「え……」
「何か予定が変わったみたいで……せっかくのチャンスだったのに」
残念だわ、と唇を尖らせる彼女に、私は膝から崩れ落ちそうになった。
これ、私、骨折り損ってやつでは。
くらくらと眩暈を感じながら、井筒先輩を放って歩きだした。しかし、彼女はまだ話し足りないのか後をついてくる。彼女も同じ総務なのだから、もとより行き先は同じなのだが。
今朝はもう、先輩の話を聞く気力がなかった。
「ロビーで待ってて、姿が見えたら上手く近づくつもりだったのよ。それなのに、いつまでたっても来ないから、見逃しちゃったのかと思って、バーに見に行ったらあんたたちもいないし。そっちはてっきり上手くやったのかと思ってたわー」
追いついて隣に並んだ彼女は、何か疑うような視線を向けてくる。
「いやだから、上手くってなんですか」
「だから、媚薬の利いた黒木さんを店から連れ出して……」
「悪魔に媚薬は効きませんでした。だからしばらく様子だけ見て帰ったんです」

間違いなく薬を盛ったようなのに、なんで効かなかったんだろう……

考えていて、ふと、思いついた。隣に座ったのが井筒先輩だと気づいていたなら、先輩が薬を盛ったこともしかして？

トートバッグに入った彼の名刺のことを思い出し、連絡してこいとは一体なんの用なのだろうと、ぞっとした。

午前中は時間が過ぎるのがあっという間だった。いつもなら、お腹が空いてきてランチの時間が待ち遠しくなるはずなのに、今日は時間が止まればいいのにと思う。

もちろん、止まりはしないのだけど。

「ここより、十階のほうが美味しいよねー」

井筒先輩が、オムライスをスプーンで掬いながら残念そうに言った。

この本社ビルには、一階ロビーと五階、十階にカフェテリアがある。一階は社員が一緒なら外部の人間も使用することができる。

社員数が多いので、カフェテリアが三つあっても昼時はどこも賑わう。私は今、井筒先輩と総務に近い五階のカフェテリアに来ていた。少し離れた席には同じ総務の女子社員、安藤さんと田中さんもいる。

あのふたりは井筒先輩と同期で、時々親しく話している。けれど、仕事に関してはノータッチだ。まあ、気持ちはわかる。

注意力皆無な井筒先輩は、備品の注文をお願いすれば桁を間違えてえらいことになったりする。下手に関わると、巻き込まれて大変な目に遭うのは自分なのだ。

「十階まで行ったら、移動に時間かかっちゃうじゃないですか」

井筒先輩の正面に座った私は、そう答えながらサラダプレートについてきていたロールパンをちぎって口に運ぶ。食べながら、テーブルに置いたスマートフォンにちらちらと視線を向け、時間を確認していた。

連絡しろとは言われたけれど、先にご飯くらい食べてもいいよね。

という考えのもとに、引き延ばし作戦に出ている。ランチを食べるのに時間がかかって連絡できませんでした、でもいいんじゃないだろうか。

そもそも、私には彼に連絡する必要などまったくないのだ。できることなら、関わることなく逃げてしまいたい……

と考えて、逃げきれなかった時のことを考えてぞっとした。何をされるとか具体的には浮かばないが、なんかぞっとした。

名刺は、念のためスマホケースのポケットに入れてある。ランチが終わったら井筒先輩から離れて、どこかで連絡しようと、思ってはいた。

考えただけで胃がしくしくと痛んできて、食欲がなくなる。それでもなんとかサラダプレートを食べ終えた。

カフェテリアを出ると、井筒先輩の足はいつものように化粧室へ向かう。後ろをついて歩きなが

ら、私は中々決心がつかずにいた。
怖い。怖いけど、やっぱり放置はまずい気がするから連絡しよう。
スマートフォンを握りしめ、覚悟を決めて井筒先輩に声をかけようとした時だ。
「天沢さん！」
後ろから呼ばれて振り向いた。
少し離れた席でランチを食べていた安藤さんと田中さんが、私に手招きをしている。見ると、別の総務の社員も一緒にいた。私たちより遅れてお昼に出てきたのだろう。
「天沢さん、主任が呼んでるって！」
「えっ？　なんでしょう」
「なんか、天沢さんご指名で総務に来てる人がいるって。お昼食べ終わったら早めに戻って来てほしいみたいよ」
えっ、なんだろう。誰？
咄嗟に黒木さんかと思ってぎくりとしたが、それならはっきりと『黒木さんが呼んでる』と言うはずだ。
手の中のスマートフォンを見て、一瞬だけ迷う。
だが、優先順位は仕事のほうが上だ。急いで仕事を片付けて、それから連絡を入れればいい。
「わかりました、すぐ行きます！　井筒先輩、先に戻りますね」
後ろにいるだろうと思っていた井筒先輩は、既にいなかった。先に化粧室に入っているようだ。

私が来なくても多分気にしないだろうということにして、私は総務課に急いだ。
社員が個人的に総務に用がある場合、昼休みや休憩時間を利用して来ることが多い。
だから昼休憩の時間とはいえ、必ず誰かが対応できるように時間差で休憩に入るのだが……
総務に残っていた主任は、福利厚生に関することに明るくなかった。主任なのに。
そしてなぜ私が呼ばれたかというと、福利厚生について聞きに来た社員の相談に、以前私が乗ったというただそれだけだった。
「わあ、それはダブルでおめでとうございます」
前回は家を建てる際に受けられる制度について質問に来られて、必要な書類と申請時期などを説明した。今回は奥様のおめでたが発覚したらしい。
「ありがとうございます。いや、別にそこまで急がないことはわかってるんだけど、気が急いちゃって」
「あ、最初のお子様でしたか？」
「そうなんです」
「それは、気が急いて当然です。楽しみですねえ。奥様は別の会社にお勤めでしたよね」
お祝いの言葉を贈りながら、質問を挟んで必要なことを尋ね、引き出しから数種類の書類を取り出した。それを、彼の前に並べてシャープペンシルで記入場所に丸をつけていく。
「出産、育児に関わる制度で申請できるのが、これとこれになります。ですが、お仕事の兼ね合いもありますし、周囲とよく相談してみてください。お越しの際には、書類のこの丸の部分に記入し

て一緒にお持ちくださいね。奥様、つわりは大丈夫です？」
「いや、それがもう既に辛そうで……」
「働きながらだと大変ですよね。労わって差し上げてくださいね」
三十代半ば、家を建てて、赤ちゃんもできて、順風満帆だなあ。
ほくほくと緩んだ顔で、私に丁寧な会釈をして仕事に戻っていく社員の背中を見送って、なんだかほっこりした気持ちになる。
「いいなぁ。三十代で家のローンかー……都心部だと無理だなー」
まあ、結婚もせずに家を買うことはないか……ひとりで住宅ローンを抱えるのはきついしね。でも、家建てるのは夢だなあ。
余った書類をもとの場所に戻して、自分のデスクにつく。ちょうどそこで、昼休憩の時間が終わった。
午後からの仕事にすぐに頭が切り替わる。
そう、私はあんなに怯えていたくせに、すぽーんと忘れてしまっていたのだ。黒木さんに連絡を入れることを。

終業時刻直前、「よし」とひとりごとを呟いてパソコンの電源を落とす。
「あ、天沢さんっ！」
上ずった声で私を呼んだのは、昼間と同じ安藤さんだった。もう終業時間なのに、またややこしい申請を持ってきた社員でもいるのだろうか。
先輩なのだし、対応した人が請け負ってほしいのだけど。
「はい、なんで……」
決して見てはいけないものを、見てしまった。
総務の入り口、社員の対応をするためのカウンターに、黒木さんが立っていた。安藤さんが驚いた顔で私を手招きししつつ、黒木さんを手で示す。
彼が私を呼んでいる、というジェスチャーだろう。
私はといえば、黒木さんの姿を見た途端スマホケースのポケットに差し込んだ名刺の存在を思い出して、急速に血の気が引いた。
しまった……なんで忘れてたの私……！
昼にやって来た幸せそうな社員にほっこりしてしまったのがいけなかった。しかも、午後の仕事は急ぎや即日対応のものが多くて、手一杯だったのだ。
呆然としながら彼の顔に焦点を合わせてしまう。やばいと思った時には、ばちっと視線が絡んでしまった。
瞬間、椅子を倒す勢いで、その場に直立した。
「も、申し訳ありません……！」
周囲の目が「天沢さん、何をやったの」と言っている。そんな中、井筒先輩だけが、期待に満ちた目をしていた。

――申し訳ありません、連絡を失念しておりました。
――昼は急遽仕事の対応に追われまして。
言い訳の言葉がずらずら頭に並ぶけれど、それを口にしたら今この場にいる人たちに、なぜ黒木さんに連絡を取る必要があったのかという疑問を生んでしまう。
何か仕事の話のフリをしてこの場を離れるしかない。
がしっとオフィス用のバッグを掴み、もう一度勢いよく頭を下げようとした。しかしそれより先に、黒木さんが口を開く。
「仕事は終わったか？」
「ひっ、はい、今終わったところで」
いちいち悲鳴のような声が出てしまうのはもう条件反射と思ってほしい。
「そうか、じゃあ食事に行こう」
「は……」
はい、と言う前に絶句した。
え、いや、なぜ？
そしてなぜそれを今ここで言う。
黒木さんが視線を伏せ、左手に嵌めた腕時計に目をやった。この場にいる彼以外の全員が固まる中、再びその目が私を捉える。
「予約してある。行くぞ」

「え、あ、でも、聞いてな」
「昼に言おうとした。連絡してこなかったのは君だ」
総務内にざわめきが広がる。
だから、どうしてそういうことをここで言うの!?
このまま彼と話していると、明らかに周囲に誤解を生みそうな会話になりそうだ。何より、昨日のことを持ち出されでもしたらたまったものではない。
これ以上、ここで彼に喋らせてはいけない。
私は慌てて総務全体に向け、勢いよく頭を下げる。
「すみません、お先に失礼しますっ！」
そうして、私は逃げるように総務課を後にした。

「な、何を考えてらっしゃるんですか！」
通路を歩きながらエレベーターのほうへ向かう。黒木さんが少し先を歩き、私は斜め後ろを早足で追いかける。途中ちらちら社員の視線を感じるが、さっきのように総務の入り口でみんなの視線を集めて話すよりはずっとましだ。
「昼に君が連絡をくれないからだろう」
「くれ……」
あれ、なんか、今ちょっと。

「寄越さない」とかじゃなくて「くれない」という言葉のチョイスが、一瞬、可愛らしく思えたのはなんだろう。

……たったそれだけのことが？　ギャップ萌えかしら。

なんとも言えない心のざわつきを、頭をふるんと振って追い払う。

「と、とにかく、食事なんて、急に言われても困ります」

というか、ふたりきりでなんの話をするのかって、間違いなく昨夜のことでしょうよ。

絶対、嫌だ。むしろ、全部忘れるので許してほしい。

私の断りの言葉に、彼は無反応だ。相変わらずスタスタと先を歩いていく。

なぜかエレベーターの前を通り過ぎ、おかしいと気づいた時には、ホールの奥まった場所にある通路の入り口にいた。ここは、非常口にしか繋がっていないから、滅多に人が来ない。

エレベーターホールの人のざわめきが遠くに聞こえる。

不意に、とん、と肩を押された。

何をするのだと黒木さんを見上げたら、いつの間にかすぐ目の前に彼が立っている。そして黒木さんの左手が、静かに私の後ろの壁に置かれた。

「……あれ？」

気がついたら壁ドン。距離が近すぎて、真上からため息が落ちてくる。

「聞かれたくない話だろうから、誘ってやったのに。別に俺は、そこらの通路で立ち話で済ませてもかまわないが」

「え」

「たとえば昨夜の」

――昨夜の。

そのワードだけでよみがえる、バーで顔を合わせてからホテルの部屋に入るまでのアレコレ。しかも、部屋に入ってから先はやけに鮮明に。

「なっ、あっ、」

話とは、昨日のことだとわかっていたはずだ。だって私と黒木さんに他の接点はない。わかっていたのに、改めて突きつけられると平静ではいられなかった。

ボンッと音がしそうなほどに顔の温度が上がる。耳まで熱い。

一気に赤くなった顔がよほどおかしかったか驚いたのか、黒木さんの切れ長の目が、軽く見開かれる。それから、至極ゆっくりゆっくり、口角を上げた。

笑った。それも、明らかな冷笑だ。

更にその唇は、とんでもないことを言う。

「随分、初心（ウブ）だな。既成事実を作ろうとしたくせに」

「ち、違います、あれは！」

「可愛らしい反応だった。色気がないわりに」

かっ……、いっ……！

可愛いって。色気がないって。

上げて落とすテンポが速すぎる。
何かを言わなければと唇を数度動かしたけれど、言葉が出ない。壁と悪魔に挟まれて、緊張による酸欠で眩暈がした。
くら、と頭が揺れる。至近距離で交わる視線が、またしても急速に昨晩の私たちを思い出させた。
「昨日のことは……忘れてください……」
好きでもない人と、あんなことをするなんて。情けないし後悔しかない。しかもなんだか、取り返しのつかない状況に追い込まれてしまいそうだ。
「……忘れろ、と言われてもな」
彼がそう言って、少しだけ身体を離した。ようやく酸素が吸えた気がする。
黒木さんの顔が私から逸れて瞳が横へ動いた。何かと思えば、彼はスーツの内側に手を入れる。その仕草が随分意味ありげだった。
スーツから出てきたものがスマートフォンだと気づいた時、私は彼の言いたいことを理解する。ばっとそのスマートフォンに手を伸ばした。
「け、消してください！」
一体、いつの間に撮られたの？
昨日は、わけがわからなくなって気を失うように眠ってしまった。目が覚めるまでの間に何があったか、私にはまったくわからない。
スマートフォンを頭上に掲げられてしまっては、手も足も出ない。当たり前だ、多分ふたりの身長差は二十センチ以上ある。腕の長さを加えたらもっとあるだろう。
卑怯だ。いくらなんでも卑怯すぎる。
キッと強く睨みつければ、彼は面白そうに笑った。しかしすぐに、その笑みを消す。
「黙って話を聞くか？」
この言葉に、頷く以外の何ができるというのか。呆然としながら、私はスマートフォンを取ろうとしていた両手を下ろす。
生まれてこの方、宗教なんてものに興味はなく、神様を意識したこともなかった。けれど、今初めて、真剣に神様に訴えたいことがある。
神様、助けて。ここに悪魔がいます……！

◇ ◆ ◇

更衣室に行き、秒で私服に着替えた。総務課の社員は制服が貸与されているが、通勤にラフすぎる服装は許されていない。今日はパンプスとネイビーのパンツに、綺麗めのブラウスを合わせた。予約した店がどんなところか気になるのだが、一応今日の服装なら問題はないと思う。
黒木さんは一階ロビーで待っていた。一瞬だけ逃げることを考えたが、お先真っ暗というワードしか浮かばなかったので、おとなしく従うことにする。

食事と言われて……それをそのまま信じた私がアホなのか。
タクシーで昨夜のホテルに連れてこられた時には驚いたけど、まさか嘘をついてまで私をどうにかするほど、黒木さんが女性に困っているはずがないと思ったのだ。
だがしかし、私は今、客室にいる。入ってすぐのところで立ち尽くし、それ以上は進めずにいた。
客室といっても、昨日と同じではなく多分ランクが高いのだろう。さっと見渡せるところにベッドはない。多分、奥に別に部屋がある。
「いつまでそこに突っ立っている気だ。変に意識されても困る」
「い、意識なんてしてません。だけど、食事とおっしゃったじゃないですか」
「すぐにルームサービスで運ばれてくる。このホテルは高輪グループと懇意で、重要な取引や会合の際に使っている場所だ。ここなら、人に聞かれてまずい話もできる」
なるほど、だから昨夜も、すぐに客室に向かえたのか。
聞いてないのに説明してくれたのは、私があんまり怯えているからだろう。
……ちょっと親切？　いや違うな、ない。脅されてここにいる時点で親切であるわけがないから。
しっかりしろ自分。
私は口を引き結んで、彼の動向をじっと見た。
ビジネスバッグをソファに放った彼は、スーツの上着を脱ぐ気配はないしネクタイを緩めることもない。
「まあ、そんなに警戒するなら、向こうには近づくな」

立ち読みサンプルはここまで

「向こう？」
黒木さんの手が、部屋の奥まったほうを顎でしゃくった。
「寝室だ」
絶対近寄らないことにする。
そろりと一歩、ドアから離れて部屋全体を見渡した。最高級ホテルの上層階、このフロアに他に部屋があるのかどうかはわからないが、見たところドアはひとつしかなかった。
広々としたリビングと、夜景が綺麗に見えるだろう大きな窓。今はカーテンが引かれていて、少し残念に思う。
窓の近くに、ふたり掛けのテーブルセットが置かれていた。
「観察は済んだか？」
声をかけられて黒木さんに視線を戻せば、唇の端を片方だけ上げて笑っている。どうしてそんな嫌な笑い方をするんだろう。しかし、それがよく似合っていた。
その時、部屋のインターフォンが鳴り、彼がずかずかとドア、つまり私のほうに近づいてきたので、慌てて横に避け道を空ける。
黒木さんがドアを開け、男性のホテルスタッフがワゴンに乗せて料理を運んできた。
……う、わ。
スープにサラダ、肉料理と魚料理がそれぞれふたり分、ふたり掛けのテーブルに所狭しと並び、中央にはかごに入ったパンが置かれた。